



永井荷風×三田文学会×市川市

新しく開く 文学の扉

市川を愛し、その晩年をこの地で過ごした文豪 永井荷風。
荷風を顕彰した文学賞が昨年11月に創設され、
栄えある第1回の受賞作が9月11日に発表されました。
最終候補作品など詳しくは右記2次元コードで確認してください。
☎0712-8557文化芸術課



提供：永井社一郎氏

荷風が結ぶ、三田文学会と市川市

本市は市制施行90周年を記念し、三田文学会とともに「永井荷風文学賞」を創設しました。

永井荷風は、明治、大正、昭和にわたって活躍した日本近代を代表する作家であり、小説はもとより、随筆、評論、演劇、詩、翻訳などその偉業は多岐にわたっています。

荷風は明治43年『三田文學』を創刊し、初代編集長となって以降、百数十年にわたる日本文芸の隆盛の礎を築きました。戦後は、その晩年を本市で過ごし、市川の風物を描いた作品を多く残しています。荷風が橋渡し役となって三田文学会と本市は深い縁で結ばれています。

文学賞の概要

本文学賞は、既刊本を対象とする「永井荷風文学賞」と公募作品を対象とする「永井荷風新人賞」から構成されます。

◎ 永井荷風文学賞

荷風の幅広い功績にならない、下記の対象分野において対象期間中に刊行された作品の中から、永井荷風文学賞に最もふさわしい文学作品をたたえる。

対象分野:小説、随筆、評論、戯曲、詩、翻訳

対象期間:毎年6月1日～翌年5月31日

賞金:100万円

◎ 永井荷風新人賞

新進気鋭の書き手の発掘と支援に情熱を傾けた荷風の精神にならない、「三田文學新人賞」を継承しました。

対象分野:小説、評論

対象期間:毎年6月1日～翌年5月31日(第1回に限り令和5年11月1日～令和7年5月31日)

要件:未発表作品で400字詰め原稿用紙100枚以内

賞金:新人賞50万円 佳作10万円

永井荷風新人賞

受賞 2作品

新人賞は4人の選考委員(いしいしんじ氏、青来有一氏、田中和生氏、持田紋子氏)で選考を行い、受賞作を決定しました。



▲春野礼奈氏

『一口きの蒐集』

著者:春野礼奈

素晴らしい賞の記念すべき第1回に選出いただき、喜びと共に畏れ多い気持ちです。私は誰も見ていなくても書き続けますが、誰かに読んでいただけることは、創作の大きな励みになります。



▲湯谷良平氏

『夜警』

著者:湯谷良平

記念すべき第1回の受賞ということで、大変光栄に思います。



永井荷風文学賞選考の様子は季刊誌『三田文學』162号に全収録、新人賞受賞作も掲載しています。

『三田文學』162号と『磯崎新論』は中央図書館の特集展示コーナーに複数冊用意しています。

◀『三田文學』162号

永井荷風文学賞記念展示

荷風が初代編集長を務めた大正4年までの『三田文學』に掲載された作品を中心に紹介しています。

☎11月27日(木)まで

☎文学ミュージアム 通常展示エリア

☎0320-3334文学ミュージアム

第1回

永井荷風文学賞
受賞作決定

受賞作品

『磯崎新論』

田中 純
(講談社、2024.11)



令和4年に亡くなった世界的建築家 磯崎新の多面的な活動を年代順に追い、彼の圧倒的創造活動の核心にあったものは何かを追求した一冊。

受賞コメント

「第1回永井荷風文学賞」という重い名前の文学賞を受賞させていただき、非常に光栄です。

磯崎新は、「建築界のノーベル賞」といわれるプリツカー賞を受賞した際、「私は建築家でもデザイナーでもなく、文人と呼ばれたい」と話していました。

今回、『磯崎新論』が永井荷風文学賞を受賞したことを知れば、磯崎さんは嬉しく、面白く思ってくれるのではないかと思います。

『磯崎新論』を通じて、建築家としてだけで語られがちな磯崎新の「文の人」である側面が広く世の中に知られ、文学に関心のある方々が、建築という分野にも目を向けていただけるきっかけになればと強く思います。



▲田中 純氏

選考委員の評価

田中純さんの『磯崎新論』の最大の魅力は、その大きさです。書物としての大きさばかりでなく、内容的にもきわめて大きく、豊饒なのです。

世界的な建築家の生涯と思想を、なによりも建築家が生きようとした「文人」という視点からまとめ、狭義の文芸批評を、広義の芸術批評へと広げること成功しました。

アカデミックな探究と、詩的な表現が奇蹟的な融合を遂げています。永井荷風の名にふさわしい文学的な達成であると思います。

▲安藤礼二氏
(文芸評論家)

決して敷居の低い本ではありませんが、磯崎新に詳しくない人が想像する磯崎新論よりは敷居が低いのではないかと思います。また、一人の人がここまで誰かに興味を持ち研究し文献を読み込み、この枚数をもってその人生の全てを、それも建築に関することだけでなく、人物論としてもまとめあげるその狂気じみた執念には、畏怖に近い尊敬を抱かざるを得ませんでした。

▲金原ひとみ氏
(小説家)

選考会は令和7年盛夏のある日、慶應義塾大学三田キャンパスにおいて開催されました。
選考委員5人による熱心な討議が行われ、受賞作が決定しました。